

コラム

日本味と匂学会と学会誌—その歴史

長井 孝紀

(慶應義塾大学 名誉教授)

今年、日本味と匂学会誌は 31 巻を迎え、その 1 号には学会の創設に尽力された栗原堅三先生への追悼文が掲げられている。追悼文で、学会の始まりは 1991 年 10 月であると触れられているが、味と匂を研究する学術団体としての活動はこれよりもずっと前、1967 年に味と匂のシンポジウムとして、すでに始まっている。味と匂の研究の国際的な学会は ISOT (International Symposium on Olfaction and Taste) であるが、この日本での開催、すなわち ISOT XI (1993 年、札幌) にも栗原先生は尽力されている。

ISOT は横浜でも開かれたことは記憶に新しい。さて、日本での ISOT の開催は何回あったのか、ご存じだろうか。京都開催を入れて 3 回でしょう、は正しくない。日本味と匂学会は円熟の期に入り、本学会の成立の経緯を知らない会員が多くなったように見受けられる。本学会の歴史を筆者の手元にある印刷物などを参照して、振り返ってみる。

学会の始まりはグルタミン酸から？

日本での ISOT 開催は驚くほど早い。1965 年、東京での開催である。これは ISOT の第 2 回大会で、1 回目はスウェーデンの Zotterman が主催し 1962 年にストックホルムで開かれている。この時のスナップ写真



図1 ウェンナー・グレンセンターでの写真。前列右より Y. Zotterman、一人おいて E.D. Adrian、佐藤昌康、一人おいて林 謙、中列中央に C. Pfaffmann、後列左端に本間三郎

がある(図1)¹⁾。中心に佐藤昌康先生が写っているほか、左端には顔をやや下向きにしている日本人がいる。誰だかわかるだろうか。慶應義塾大学の生理学教授、林 謙 (ハヤシタカシ) である。はて、味あるいは匂、いずれの研究者だろうかと思うに違いない。そのいずれでもない。条件反射の権威であったソ連のパブロフに学んだことで知られる、大脳生理学者である。しかし、どうしてここに? 当時、オランダのライデンでは国際生理学会 (IUPS, International Union of Physiological Sciences) が開かれていて、ISOT はこのサテライトシンポジウムとして開かれた。そのため、味覚、嗅覚の2つキーワードだけでは表せない分野の研究者も参加していたのだろうか。林先生だけではない。後列左端は千葉大学の本間三郎先生が写っているが、筋紡錘と脊髄の神経生理学が専門である。林先生の ISOT 論文では、日本人に好まれる梅干しの実物を被検者に見せると、唾液腺分泌の増加が条件反射として起こる、とある。味刺激によって起こるはずの反応が視覚の刺激で起こるのだから、今考えても面白い。

このスナップ写真のなかには、感覚生理学の祖ともいべきエイドリアン卿 (Sir E. D. Adrian、前列右から3人目) も写っている。卿は ISOT 開会の辞を述べている。その中で、視覚、聴覚、そして皮膚感覚の研究を進めるうえで、味や匂の刺激がどのようにして受容器の反応を起こすのかを知ることも重要だと指摘している。エイドリアン自身は味覚嗅覚の研究はしていない。本稿の読者諸氏は、この ISOT を主催している Zotterman を味覚生理学者として認識しているだろうが、彼は若き日にケンブリッジ大学でエイドリアンの研究室で学び、研究テーマは筋紡錘からの感覚神経インパルスについてだった²⁾。この研究はスナップ写真の一人である本間先生の専門と重なる部分がある。研究者どうしのつながりを感じさせる。本間先生自身は研究発表をしていない。ほかにも、ISOT に出席だけしている研究者がいる。視細胞の生理学研究で知られる富田恒男先生 (慶應義塾大学) である。味覚嗅覚以外の分野の研究者が参加していたことが、この ISOT の特徴だったのではないかな。

林先生の唾液反射の研究は、味覚に関わる部分があ

るので、ISOT での研究発表に臨んだと考えて不思議はない。ところが、それだけではなかった。主催者の Zotterman は第 2 回の ISOT (ISOT II) を東京で開くことを林先生に提案し、林先生はこれを引き受けたのだ。3 年後の ISOT II では Zotterman が開会の辞を述べるのだが、そのなかで東京での開催のいきさつを説明し、林先生に対し謝辞を表している。ストックホルムでの ISOT は東京での ISOT II 開催の準備の場でもあったのだ。それにしても、のちに味と匂学会を引っ張って行く、佐藤、高木、河村の三巨頭ではなく、味覚嗅覚研究とは関わりが少なくと思われる林先生が、どうして ISOT II を引き受けたのだろうか。その理由は 2 つある。一つは、ISOT は国際生理学会 (IUPS) のサテライトとして開かれていて (現在は IUPS とは切り離されている)、1965 年の IUPS は東京開催であったことだ。この大会長を務めたのは加藤元一先生 (慶應義塾大学、生理学教授) だったので、同じ大学の林先生は ISOT の世話をするという流れができたようだ。

もう一つの理由であるが、これに答えるためには、林先生についてもう少し紹介しておく必要がある。林先生は 1960 年代、非常に著名な研究者で“頭のよくなる本”と題した啓蒙書を光文社から出している (図 2)。この本では脳に多く含まれているアミノ酸類の重要性が説かれているのだが、そのひとつグルタミン酸 (glutamate) について、「脳髄はそれのあるやり方と取り入れて、機能代謝の材料とする」(本の本文より引用) とある。“頭のよくなる本”の読者のなかにはグルタミン酸を食べることはよいことだと受けとったものがい

た。筆者の小学校で同級生の一人は、頭をよくするのだと言いながら胡瓜に調味料の MSG (monosodium glutamate) をたっぷりふりかけ、一本まるごと食べて見せた。筆者はこのまねはしなかったが、彼は自慢げだったことをよく覚えている。

筆者の手元にあるこの本の奥付には昭和 35 年 (= 1960 年) 10 月 10 日初版、同年 11 月 27 年 31 版、とある。ひと月でこれだけ版を重ねたということは、物凄く売れたわけだ。当時、ミリオンセラーを連発していたシリーズ、カッパブックスのなかでも筆頭だった。林先生は推理小説家としても有名で (ペンネーム、木々高太郎)、多くの著作がある。そのおかげで、ISOT II を主催する事務局の一員を務めるだけでなく、経理面を個人的に支援する余裕ができた、と筆者は推論している。札幌と横浜での ISOT の開催当時、円が強くなっていたとはいっても、資金集めにあちこちの団体に働きかけをしたことを覚えている読者は多いだろう。1965 年、ISOT II のときは 1 ドル 360 円で、しかも主催する学術団体がいないのだから、普通に考えても招待講演者の旅費を捻出するのは容易でなかっただろう。

JASTS の始まり

東京での IUPS ではシナプスの生理学で高名なエックルズ (J.C. Eccles) など講演をして、日本の生理学界に大きなインパクトを与えた。ISOT II の開催も日本の味と匂の研究者に、大きい刺激となり日本国内でも味覚嗅覚の研究会を学際的に行おうという気運が生まれ、佐藤昌康教授その他私 (= 高木) を含めて計画を練り、1967 年 10 月、阪大の河村洋二郎教授の主催の下に、第 1 回味と匂のシンポジウム (JASTS) が大阪で開催された (下線部、文献リストの 3 より原文のままコピー)。これが味と匂学会の前身のスタートである。学会や研究会では堅苦しい感じがするのでシンポジウムと呼んだのだ⁴⁾。しかし、カタカナ表記にはふらつきがある。味と匂学会の HP によると、第 1 ~ 3 回では味の匂の“シンポジウム”と呼んでいたが、一旦シンポジウムと呼び替えた後、またシンポジウムが復活した後、シンポジウムという呼び方に定着したのは第 7 回以降である。

当初、この研究会を“シンポジウム”と表記したのは河村先生の発案である。Symposium をどのようにカタカナにするかは悩ましい。河村先生は研究会の特徴に符合するような独自の呼び方をしたかったらしい。“u”をアとするのは英語の発音にとっても近く、新鮮に聞こえたのだろう。しかし 4 回目の研究会のときに“si”の英語発音が優先されずに、続く“u”は日本語風にウに、結果、シンポジウムである。前節の下線部を

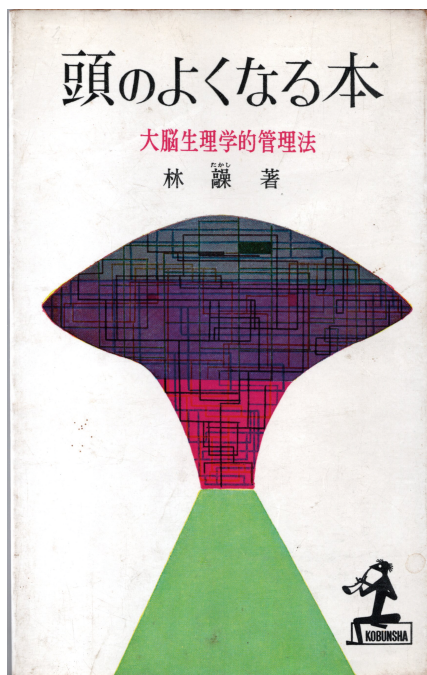


図 2 カッパブックスの表紙

日本味と匂学会と学会誌—その歴史

みると、高木先生はジュウと書いているので、さらに混乱させられる。佐藤先生はどう考えたか、記録がない。くどくなるが、JASTS の 3 番目の S はシンポジウムの頭文字ではないことは、読者諸氏はご存じですね。

会員数 85 名で始まった JASTS は年々盛会となり、1986 年の第 20 回大会時点では会員数 458 名にまでに発展した。このころからシンポジウムを学会にしようという話が出ていたが、1991 年 10 月に塩尻で開催された第 25 回 JASTS の際に、シンポジウムを発展解消させて日本味と匂学会として発足させることが決まった。12 月 14 日に学会の第 1 回運営委員会が開かれ、初代の会長として渋谷達明先生（筑波大学）が選出され、学会活動がスタートした。また、会員への連絡と相互の情報交換のため「ニュースレター」を発行することになり、編集委員長小川尚先生（熊本大学）のほか 8 名が委員と決まった。筆者もその一員であったのでニュースレターを保存してあり（ただし、6 号は紛失）、本稿執筆の参考にした。このニュースレターは 1992 年 3 月から 1994 年 3 月までの間に 6 回発行されたが、同年 6 月に日本味と匂学会誌に置き換わった。

日本味と匂学会誌の刊行

このようにして、シンポジウムから学会へ組織替えされたのだが、学術集会の呼び方には過去を引きずった時期があった。1992 年 12 月東京では、第 26 回味と匂のシンポジウムとして開催されている。さらに 1993 年 7 月札幌で開かれた ISOT は日本向けには第 27 回味と匂のシンポジウムと呼び、1994 年熊本での第 28 回も同様の呼び方をしている。翌年 1995 年では“第 29 回味と匂のシンポジウム”との表記のあと、カッコ内に 1995 年日本味と匂学会大会と断りをつけて、開会の案内が送られている⁵⁾。晴れて一本化、日本味と匂学会として開かれるのは 1997 年金沢での第 31 回大会からである。

ニュースレター 5 号を発行した時には、このような情報交換は 1994 年 3 月発行の 6 号で最終とすることが決まっていた。同時に、日本味と匂学会誌を作る作業が始まった。筆者は学会誌の表紙のデザインを考えるよう、栗原先生らに依頼された。B5 サイズとすること以外は何も指示がなかったので、大学図書館へ行き、日本で発行されている学会誌の表紙をコピーしてきた。手元には日本薬理学雑誌、日本医学放射線学会誌、日本泌尿器科学会雑誌のコピーが残っているが、これらは学会名の文字配列とフォントがきれいだったので選んだと記憶する。しかし、文字以外に独自性を持たせたいと考えたのが、表紙に写真を載せることだった。1990 年代、国際誌では掲載された論文の中から、視覚的にアピールする実験結果の写真を載せるこ

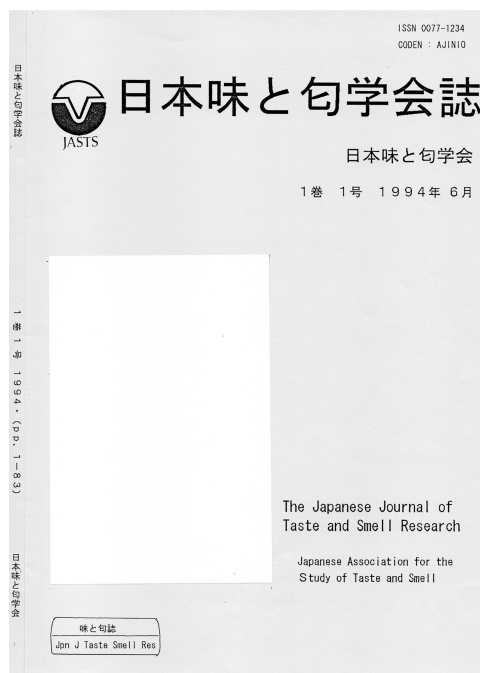


図3 日本味と匂学会誌の表紙の案

とが流行し始めていたからだ。前記の 3 つの日本の雑誌には表紙写真はなかった。1994 年の 5 月 12 日、フォントや文字の配列を考え、栗原先生のところへ FAX で送った元図が図 3 である。白抜き部分は写真を載せる位置である。このデザインで同意が得られたので、次に印刷会社から色見本を取り寄せ、表紙の地色を検討した。短冊状の束になったたくさん色見本から選んだのが、果物のカキの色に近い朱色だった。日本の学会誌には暖色系の表紙はなく、選んだこの色



図4 カラー化された表紙の最初の案

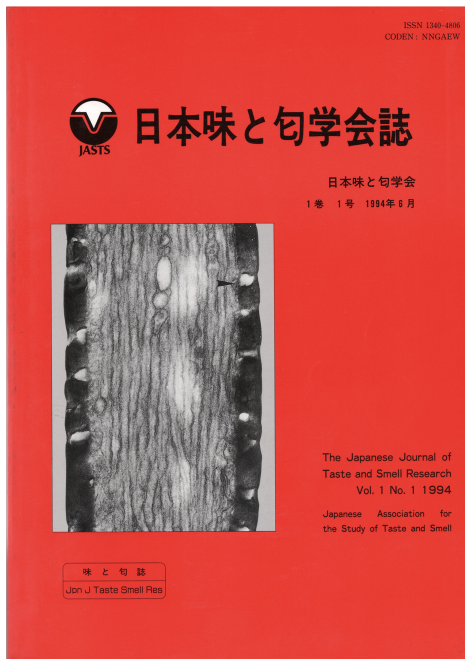


図5 学会誌の第1巻 第1号

は目立つと思った。栗原先生の同意が得られ、作ったサンプルが図4である。実は表紙のこの電顕写真は使われず、実際の第1巻1号（1994年6月発行）の表紙を飾ったのは井濃内順先生（蚕糸・昆虫研、当時）によるミヤマダイコクコガネの嗅感覚子だった（図5）。サンプルとして使われた電顕写真はどなたのものか記録が残っていない。表紙には学会のロゴマークが添えられている。これは筆者が考えたものではない。味と匂学会員に対して賞金付きの公募があり、一位になったデザインが採用された。学会長である渋谷先生から送られてきたロゴを図3に差し込んだが、最終案ではロゴの位置や学会名の大きさが微妙に違っている。表

紙の下の方には学会誌の名前、巻（号）、発行年が英語表記されている。さらにその下段に小さめのフォントで学会名が Japanese Association for the Study of Taste and Smell と表記されている。味と匂について毎年、議論を交わす集会をシンポジウムと呼びたくなるのは筆者だけであろうか。3番目のSにはその意味はないのだが。

学会誌の表紙の色について、栗原先生に評価していただいたので、筆者は大変嬉しかった。味と匂学会誌を本棚に並べておくと、背表紙をただけでほかの学会誌と容易に区別がつき、引っ張りだせるのがよい、という評価であった。このような学会のデザインは長く続いたが、数年前に大きさがB5からA4に変更されたのには少し驚いた。フォントの大きさが、紙面の大きさのためか、変更されたようだ。どのような経緯で変更が決まったのかは知らない。日本味と匂学会誌は冊子体としては発行されないのだから、大きさはもう、どうでもよい。しかし、色はそのままであってほしい。本棚に並ぶことはないのだが。

- 1) 佐藤昌康：私の研究遍歴、非売品、pp.72 (1988)
- 2) Adrian ED and Zotterman Y: The impulses produced by sensory nerve endings. Part 2. The response of single end-organ. *Journal of Physiology* 61, 151-171 (1926)
- 3) 高木貞敬：日本味と匂学会ニュースレター (JASTS Newsletter 1, pp.4 (1992)
- 4) 河村洋二郎：味と匂のシンポジウム設立の思い出、ニュー・フレーバー 21(3), pp.2-3 (1987)
- 5) 冨田寛：第29回味と匂のシンポジウムのお知らせ、日本味と匂学会誌 2(2), p(1) (1995) 注：この頁は雑誌の本来の頁ではなく、綴じ込み印刷された頁。